

片はないであろうとの推測によるものである。文字は上半部では左側一部を欠損するほかは、ほぼ一行全体が残り、下半部では右側半分を欠損する。三文字目は「秦」または「奈」、五文字目はリットウが残り、「別」または「利」の可能性がある。下半部には「年」の文字がみえるが、その上下は数字ではない。

以上六点の木簡の内容を通覧すると、人名と思われる記載のあるものに(1)(3)の二点があり、稲束に関する記載のあるものに(3)(4)の二点、地名の記載の可能性のあるものに(4)の一点がある。なお、(2)は形代の可能性が高い。内容の推測できる木簡から考えると、人員、稲束の管理に関わって作成された木簡群である可能性があり、作成主体としては官衙が一つの候補として挙げられる。

なお、釈文は志賀公園遺跡木簡検討会（清田善樹・玉井力・福岡猛志・和田萃・古尾谷）における検討および渡辺見宏氏の「ご教示を踏まえ、古尾谷がまとめたものである。また、本稿の内容は『志賀公園遺跡』（後掲）一六七～一七四頁の記述に基づく。

## 9 関係文献

（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター『志賀公園遺跡』（二〇〇一年）

（1）7 永井宏幸、8 古尾谷知浩（名古屋大学）

## 愛知・下懸遺跡<sup>しもかけ</sup>

- 1 所在地 愛知県安城市小川町下懸
- 2 調査期間 二〇〇〇年（平12）二月～二〇〇一年三月
- 3 発掘機関 （財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 川井啓介・竹内 睦・鈴木 裕・皆見秀久・池本正明
- 5 遺跡の種類 集落跡・自然流路
- 6 遺跡の年代 弥生時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



遺跡は、矢作川によって形成された沖積低地の微高地上に立地する。河川改修工事に伴い、三七〇〇㎡を調査した。

検出遺構は、弥生時代中期、弥生時代終末期から古墳時代前期、および奈良時代から鎌倉時代にまとまり

が確認でき、中心となるのは弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構である。居住域と、その周辺に展開する自然流路が確認されている。自然流路からは、弥生時代終末期～古墳時代初頭の木製品も出土し、その中には未製品も多数含まれる。

奈良時代から鎌倉時代の遺構は、土坑・溝などが確認されているが、分布は希薄で性格が判明しないものがほとんどである。木簡は、自然流路の上層から一点出土した。伴出資料は乏しいが、奈良時代に帰属する可能性が高い。

## 8 木簡の釈文・内容

### (1) ・「＜春春春秋尚尚書書律

・「＜令令文文□□□□是人」  
〔是カ〕

(259)×24×5 039

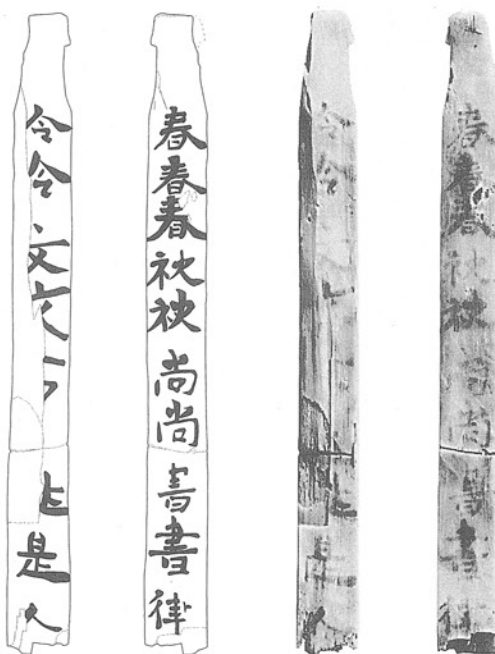
出土した木簡は、四書五経の書名などを墨書した習書木簡である。上端の一部と下端が折損している以外は、ほぼ原型を保つ。表面でいう「尚」と「書」との間で折れた状態で出土しているが、この部分の断面には刃物の痕跡が観察でき、キリオリによる切断であったと考えられる。木簡の裏面左側には文字面の剝離が観察できるが、この段階で生じたものであろうか。

なお、木簡の釈読などは奈良文化財研究所の渡辺晃宏、馬場基、市大樹、吉川聡の各氏からご教示を得た。

## 9 関係文献

池本正明・福岡猛志「下懸遺跡出土の木簡」(愛知県埋蔵文化財センター「研究紀要」第三号 二〇〇二年)

(池本正明)



(デジタルカメラによる  
赤外線撮影)